

孤立孤独の軽減に向けた多世代間交流の研究

－SDGs11ちゅっぴいふあーむつながるプロジェクトの事例研究－

A study of intergenerational exchanges as a solution to the reduction of social isolation and loneliness – With a case study of the SDGs11 Aomori Yokouchi Connect Project

齋藤 雅美^{*} 兼平 友子^{**} ゲン・チ・ギア^{***}
Masami SAITO Tomoko KANEHIRA Chi Nghia NGUYEN

^{*}青森中央短期大学幼児保育学科専攻科福祉専攻 ^{**}青森中央短期大学幼児保育学科

^{***}青森中央学院大学経営法学部

^{*}Department of Welfare, Aomori Chuo Junior College

^{**}Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

^{***}Faculty of Management and Law, Aomori Chuo Gakuin University

Keywords：孤立孤独 SDGs11 コミュニティファーム

I. 研究の所在

1. 目的

本研究は、2022年度あおもりフィールドスタディ支援事業¹⁾として採択され行われたうちの一部分として、コミュニティファーム横内（以下、横内ファーム）の活動をまとめたものである。近年、我が国の高齢化は世界に類をみない速さで進んでいる。全国の高齢化28.1%（2018）²⁾に対し青森県においても29.0%（2018）³⁾であり、今後ひとり暮らし高齢者（以下、独居高齢者）は41.5%（2040）⁴⁾になることが予測されている。一方で、2019年末中国武漢よりはじまった新型コロナウイルス感染症によるコロナ禍で、人脈の寸断と独居高齢者の増加により孤立や孤独による問題の深刻化が懸念されている。⁵⁾そこで、2021年2月内閣府に孤立孤独対策室が設置され、全国16歳以上を対象とした2万人の孤立孤独アンケート調査が実施された。

その結果に基づき、全世代や在留外国人を含むライフステージに合わせた政策の充実の強化が提言され、これまでにあったものを含め孤立孤独を社会問題と捉えたイギリスに次いで、国の課題として取り組むこととなった。^{6) 7)} その取り組みの基本理念のひとつに、「人と人とのつながりを実感できるための施策の推進」が盛り込まれた。「つながり」を重点に置く背景には、1995年阪神・淡路大震災や2011年の東日本大震災といった自然災害があり、これらは人と人とのつながりの重要性を認識する機会となった。このように、政府は孤立孤独の対策には人との「つながり」が実感できることが

重要と述べ、孤立孤独の問題の解消だけではなく（人の幸福感）の向上に資する考えで政策を推進している。⁸⁾

このような政府の対策の推進を受けて、全国の各自治体やNPO法人等では孤立孤独対策の予防に向けた、さまざまな取り組みが進んでいる。⁹⁾ その取り組みの一つとして2021年度、青森中央短期大学横内地区まちづくり協議会学生サポートチームの「SDGs11つながる青森ようちプロジェクト」で地域の独居高齢者等に対し花を配り、育ててもらった花を押し花にして提供する等さまざまな活動が報告されている。¹⁰⁾

この報告にもあるSDGs「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」¹¹⁾には国連193カ国において2030年までに達成する17の目標と169のターゲットが示されており、その中のSDGs11では「住み続けられるまちづくりを」が掲げられている。

このSDGs11において、今私たちで取り組めることとして「空き農地を活用した地域活性化の実現」を目指していきたいと考え、今回の「コミュニティファーム」の企画となった。

この企画は青森中央短期大学ちゅっぴいふあーむサークル（以下、サークル）の留学生を含む学生が、空き農地を利用した横内ファームでの花や野菜の栽培を通して、多世代の地域交流を試みたものである。筆者らは、本サークル顧問および本事業の代表を含む者と協力者としての立場で執筆する。加えてこの活動は、2022年度青森フィールドスタディ支援事業として、地域課題の解決「人とのつながりの再生・促進」「若者の定住促進」の意義・目的から孤立孤独の予防に資すると提案し、審査により採択され実施したものである。

以上のことから、本研究では、既存研究でのコミュニティファームや「農」の学生活動を鑑み、本活動が学生や地域住民等、参加者の相互交流を通してどのように孤立孤独の軽減に貢献できたかを考察することを目的とする。さらに今後の活動の展望も提言する。

2. コミュニティファームの定義

コミュニティファームには明確な定義はないが、ここでは上記の理由から「地域の方々と共に、花や野菜を育て、収穫物で調理し共食などを通して多世代が交流すること」と定義する。

II. 研究方法

1. 方法

これまでの学生の活動としてコミュニティファームを利用した地域交流について既存研究を調査し、横内ファームの実施内容から鑑み、参加者間相互の交流意義について考察する。

2. サークル参加学生の構成と活動参加対象者

本サークルには、青森中央短期大学幼児保育学科、青森中央短期大学幼児保育学科専攻科福祉専攻、青森中央学院大学、青森中央学院大学大学院（留学生：ベトナム、タイ、中国、マレーシア）の学生が参加している。

また、本サークル活動への参加対象者は、地域の住民の方全ての世代（幼児・小学生～高齢者）を対象としている。

3. 調査方法

- (1) Google Scholarに「学生活動」「コミュニティファーム」を入力し、検索した結果のうち筆者が必要と考える論文を考察する。
- (2) 2022年度の横内ファームの内容について挙げ、それぞれの内容について参加者の相互交流を通してどのように孤立孤独の軽減に貢献できたかを考察する。
- (3) (1)(2)を比較検討し、今回の活動の意義について明らかにする。

Ⅲ. 先行研究

コミュニティファームについて、菊池（2019）¹²⁾ は大都市における「農」を「生産空間」と「消費空間」として捉えており、「生産空間」とは農業生産、つまり農業で生産された農産物を何等かの形で販売することで、直売所が発達していると述べている。また、「消費空間」については、農地を「余暇空間」を重視したコミュニティガーデンとして営利目的ではなく余暇や福利厚生のための農地と紹介し、都市住民の農村的雰囲気に対する憧れや楽しみに重点を置いているものと言及している。さらに農村で行われる観光全てのルーラルツーリズムにおいては、訪問者自らが自分のペースで観光案内での地図をもとに農村の魅力ある場所を訪問・利用できるサークルファームツアーのような仕掛けが必要であると述べている。このように、大都市では「農」の楽しみかたも観光への取り入れ方もさまざまな方法があり、運営のあり方も多様である。

また、大学生の教育の場として宿利原ら（2020）¹³⁾ は、鹿児島県垂水市大野地区の地域コミュニティの教育関係共同利用拠点でさまざまな大学を受け入れ、地域コミュニティ分野の公開森林実習のひとつとして、農家で農作業体験や宿泊、地域住民との交流を行っている。この地域の取り組みの他にも地域の伝統食材のブランド化や加工品の開発があり、その目的は交流人口・定住者増加である。また、東京農業大学の「ファームステイ」の科目の2つの成果の1つ目は学生自身が聞くことの学びと、2つ目は大学生が聞き書きした「記録」が地域の歴史に共有されるといった価値が見いだされたこととしている。この農業体験では、農業もさまざまであることも学びとしているが、初対面の高齢者とのコミュニケーションは学生の学びと同時に、高齢者にとっても若い世代との交流が広範な価値を見出していると考えられる。また「食育」と「農」を結びつける「食農教育」として中山ら（2009）¹⁴⁾ は文京・食農教育ファームで幼稚園児に参加してもらい、「食育」と「農」を結びつける「食農教育」を実施した結果、子どもたちには「農」「食べ物・自然への感心」「人とのつながり」の意識が向上し、保護者にとっても「将来につながる体験」「幼児期からの体験」「継続的な取り組みの重要性」と述べ、コミュニティ再生の有効的な取り組みとして報告している。また、大学内のコミュニティファームの活動として桜井（2016）¹⁵⁾ によると、立命館大学大阪いばらきキャンパス・コミュニティ・ファームの多世代交流の促進の分析から、大学生の存在意義や効果について、自分の存在感や役割について学ぶことができたと述べている。さらに今野（2021）¹⁶⁾ によると、大学生は「農」のアルバイトは選択肢にないことを明らかにした上で、近年の高齢化により「農」への人手不足の現状の補完する目的とした、農家とのマッチングで「名寄市農園アルバイト事業」として実現したことを報告している。そこで、学生に農に目を向けてもらうためには、金銭以上の付加価値を付けなければならない、そのためには「食農教育」の視点を学生・農家の両側で持っている必要がある

ことを言及している。

以上のことから、コミュニティファームで活動することにより「食・農・食農教育・産業・コミュニケーション・観光」のほか、「人とのつながり」にも貢献できることが示唆される。また、本サークルの特徴でもあるコミュニティファームへの留学生の参加については既存の研究にはない希少な活動であると考えられる。

IV. 横内ファームでの取り組み

1. コミュニティファーム実践内容

青森市横内は広さが1400平方メートルである。実施期間は5月～11月、プログラムは全10回（以下、表2）であった。実施内容の一部を以下で説明する。1回の参加平均は18名であった。

○プログラム例

1-1 みんなの食堂「ベトナムを知ろう」（表2. NO7）

本プログラムでは、コミュニティファームで地域住民と様々な地域活動を推進してきた。その中で、コミュニティファームの収穫物パクチーを使ったベトナム料理・フォーを留学生が主体となって伝える「みんなの食堂」の開催、その際に異文化交流として参加者の方と「ベトナムを知ろう」という交流イベントを開催した。このイベントでは、参加者がベトナムの代表的料理「フォー」の作り方を青森中央学院大学在籍中のベトナム出身の留学生から教わり、レシピと一緒に材料を持ち帰りとした。参加者は（幼児、小学生、若者、留学生、高齢者等）の30名であった。またこのイベントの中の異文化交流企画では、同大学学生と青森中央短期大学生の企画した小学生から高齢者までみんなで取り組める異文化理解クイズ大会を通じて、ベトナムの文化、常識だけではなく、ベトナムと日本の文化の違い等について学び合う機会となった。初めは多少緊張していた様子の参加者だったが、互いの言語を教え合いながら作成したオリジナルの名刺づくりや、クイズの回答を相談し協力し合うことで、すぐに打ち解け言語理解を超えた交流となった。

1-2 横内秋ねぶた「みんなの食堂ーココナツミルクのかぼちゃスープ」（表2. NO7）

2012年から5年間続いていた横内ねぶただったが、近年新型コロナウイルス感染症の影響や、個人の負担増加、製作者の高齢化により中断されていた。しかし、去年、2022年に地域の人々が集まる機会を「横内秋ねぶた」として、横内地区まちづくり協議会、横内地域に住む住民の方々、横内地域にある大学に通う日本人学生と留学生、その他多くの方々の尽力により横内秋ねぶたが開催された。当日の参加者は大いに盛り上がり、特に、地域内の大学に通う日本人学生に加え、各国の留学生（ベトナム、タイ、中国）も住民として参加したことは、多世代交流に加え多国間交流ともなり、日本の文化を肌で感じる事ができる貴重な経験になった。

そこで「横内秋ねぶた」を盛り上げるため、ねぶたの出発地点（常福院）で200名程の人々に「みんなの食堂」として学生（留学生を含む）・大学教員、専門学校教員、地区社会福祉協議会、高校生（計18名）が協働し料理を提供したのがこの企画である。タイ出身の留学生が作った自国のデザート「ココナツミルクでかぼちゃのスープ」は本場の味さながらに提供し場を盛り上げた。大勢のねぶた

参加や、協働で場や料理の提供をすることで、ごく自然に多世代間の交流や多国間交流が生まれ、その場が楽しい雰囲気に包まれた。

1-3 花の定植－ほうき草－（表2. NO2）

ほうき草（以下コキア）は町おこしや観光にも利用される植物であることがメディアで紹介されている。本サークルでは、昨年地域高齢者女性（89歳）が育てたコキア3本のこぼれ種を育て130本となった。（以下図2）この女性は、幼少期に庭のコキアを使って祖母がほうきを作っていることを思い出し、今度は自分で育ててほうきを作ってみようと園芸を楽しんだという。コキアは若い世代の感覚と違って、高齢者にとっては家庭でほうきを作るといったことは生活の必須であったが、現在はその感覚はない。掃除をロボットがするような今の時代にとって、ほうきの作り方を教わることは昔の生活文化の伝承であり、高齢者から昔の生活についての話を聞ける貴重な体験と考え、ほうき作りが計画に盛り込まれた。よって、コキアは世代間交流に適していると考ええる。

表2 コミュニティファーム横内

NO	概 要
1	畑整備, 看板作成
2	畑整備, 花の定植
3	畑整備, 「みんなの食堂」ハーブを使った肉料理
4	畑整備, 「みんなの食堂」ハーブを使ったイタリア煮込み料理
5	畑整備, 「みんなの食堂」横内秋ねぶた、タイのかぼちゃスープ、やきそば
6	畑整備, 花の寄せ植え、ラベンダーバスソルト作り
7	畑整備, 「みんなの食堂」ベトナム料理、タイ料理
8	畑整備, 「みんなの食堂」ハーブを使ったイタリア煮込み料理
9	つけもの野菜収穫, 「つけものグランプリ」「花の寄せ植え」
10	魔女集会、コキア移植



図1 ベトナム料理フォー



図2 コキア栽培の様子

V. 結果

今回のプログラム全活動を通して、共通していたことは、参加者は初対面にもかかわらず、開始後まもなく自然に打ち解けていたこと、草取りや畑作り、料理作りを通して自然とお互いに教え合ったり協力し合ったりという経験ができていたことであった。そこには世代の違いや国・言語の違いを超えた交流が生まれていたように感じられた。そして参加した方たちみんなが、楽しかった、また参加したいという感想を口にしてくれたことが、今回の活動の目的「参加者の交流を通して孤立孤独に貢献する」を大いに達成できたのではないかと考える。

VI. 考察

以上のことから、コミュニティファームの活動の意義として以下の6項目が考えられる。

1. 健康

これらの園芸活動の効果について、吉永ら（2022）は、フラワーアレジメントの効果として認知症や介護度の重症化予防効果も検証している。¹⁷⁾ 高齢化による認知症や介護の重度化は社会問題にあることから、今後は、フラワーアレジメントのような園芸が非薬物でありながら認知症や介護度の重度化を予防できることは重要であると考えられる。また、園芸活動は医療面において近年では病院の敷地内の緑地のリハビリ効果¹⁸⁾ に影響があることが報告されている。

2. 地域活性・心の癒し

今回のプログラムの中で、青森市を通じてワーケーションとして東京から中国人家族（夫婦2名、2歳の幼児1名）の参加があった。この時、サークルメンバーの留学生が英語・中国語・日本語で対応した。

参加の目的は、「子どもを土や自然に触れさせたい」ことであり、解散時には2歳児は「草取りが楽しかった」と言っていた。他のプログラムの際に参加した幼児も同じく「草取りで楽しかった」「気持ちがすっきりした」と話していたことから、自然の中で土に触れることは、自然とストレスの緩和に繋がっていることが考えられる。^{19) 20)}

また、初めて訪れたにもかかわらず、企画の最中楽しんでもらえたのは、そこに参加していた地域の方や学生とともに自然な形で交流できたからなのではないか、と考える。そこには言語の壁はあまり感じられなかった。これには土や自然の中での草取りや収穫を通していることが少なからず影響していると考えられる。このことから、今後の活動の継続においてコロナ禍で進んだ2拠点生活の可能性、ワーケーションの可能性が考えられる。

3. 多様性の容認・ストレングス

横内ファームの開設にあたり、看板を留学生（ベトナム・中国）に作ってもらい、地域の方と取り付けた。それは横内ファームの交流の始まりであり、留学生の持てる力としてとても魅力を感じた。（図3）

さらに「みんなの食堂」では収穫物を使って料理をし、共食及び持ち帰りにした。ここでは留学生が主体になれるよう意図的にメニューを留学生の国の得意料理で作ってもらうようにした。留学生が

積極的に料理を作って参加者に提供することで、横内ファームでの機会が留学生の「もてる力」であるストレングスを発揮する場となっていた。提供してくれたのはタイ料理、中華料理、ベトナム料理であった。このような自国の料理を作り食べること、提供することは、留学した土地でのさみしさの軽減にもつながり、自己肯定感も増すのではないかと考える。とれたての収穫物をその場で調理して共食することは、共食の意義である参加者同士が一時的に食卓を囲み他者を認め合える機会である。

4. コミュニケーション・人とのつながり

現代の学生の課題の一つに、初対面でのコミュニケーションの苦手意識がある。本サークル活動のように学生同士・留学生同士が花や野菜を地域高齢者と一緒に育てながら交流することを重ねることで苦手意識も軽減すると考える。また地域高齢者が若い世代と交流することで得られる効果には、若い世代の介護者に対する抵抗が軽減されるなどの報告もある。留学生や学生が地域高齢者との交流の中でやさしくしてもらったりすることで、地域に愛着を感じ、若い世代が地域に定着する可能性も考えられる。

5. 自活力・植物への関心

我が国の物価や燃料が高騰している。そこで、横内ファームでの園芸で野菜づくりを知ることで、現代においても生活していく力を育むことが自活力に繋がると考える。

6. 孤立孤独の軽減

孤立は男性独居高齢者にリスクが高いことが検証されているが、本プログラムの最終回には、男性高齢者（独居高齢者を含む）のみが自然と集まるようになり、先に集まった男性が女性参加者を誘いにいき女性参加者が後から大勢参加したことは、本プログラムが多大な貢献できたと考えられる。

以上の1～6を図にすると以下（図4）となる。



図3 コミュニティファーム横内看板取り付け

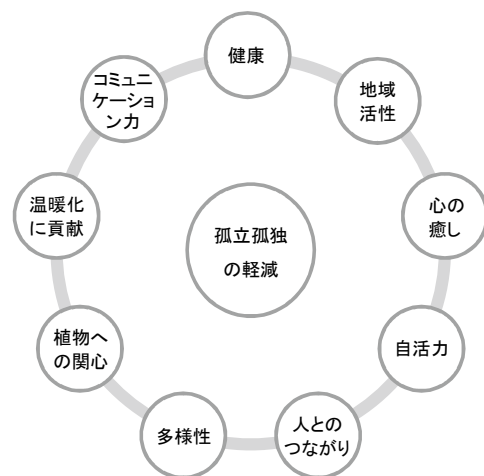


図4 コミュニティファームの活動の意義の構図

VII. 結論

本論では、コミュニティファームの既存研究を踏まえて、本研究活動を行うことによって参加者の交互交流を通して、孤立孤独にどのような貢献ができたかを考察してきた。園芸を通じての多世代間・多国間交流は、上記に示した様々なメリットを持ちあわせ孤立孤独の軽減へとつながっていると考えられる。また本研究活動は「消費空間」として「余暇活動」の取組みであること、ワーケーションとしての可能性も含め実現することで地域活性に多くの意義をもたらすとも考えられる。さらに参加学生の中に留学生もあり、他にはない多国間交流が可能となる希少な活動であると考えられる。さらには、孤立しやすいとされている男性独居高齢者の参加も促進されることが分かり、孤立孤独の軽減につながるであろうこの活動を継続していくことの意義を感じる。

このことから、本研究でコミュニティファームの活動意義は、「健康」「地域活性」「心の癒し」「自活力」「人とのつながり」「多様性」「植物への関心」「温暖化に貢献」「コミュニケーション」が促進され、「孤立孤独の軽減」に寄与できると提言する。それは、SDGs11「住み続けられる街づくり」にも貢献できると考えられる。

今後は、孤立孤独のデータ分析を基に、さらなる活動の活性化に努めていきたい。

謝辞：この活動に協力くださいました方々に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 青森市あおりフィールドスタディ支援事業
<https://www.city.aomori.aomori.jp/keizaiseisaku/shiseijouhou/matidukuri/toshidukuri/chuushin-syoutengai/10.html> (2023.1.10)
- 2) 総務省統計局<https://www.stat.go.jp/data/topics/topil131.html> (2023.1.10)
- 3) 厚生労働省<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/backdata/01-01-01-07.html> (2023.1.10)
- 4) 同上
- 5) 内閣官房「孤独・孤立対策の重点計画」(令和4年12月26日孤独・孤立対策推進会議決定)
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/juten_keikaku/r04/jutenkeikaku_gaiyo.pdf (2023.1.10)
- 6) 同上
- 7) 全国知事会地方創生対策本部「孤独・孤立についての全国アンケート結果の概要」https://www.nga.gr.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/2/20210527_04anketo.pdf.pdf (2023.1.10)
- 8) 内閣官房「孤独・孤立対策の重点計画」
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/juten_keikaku/r03/jutenkeikaku.pdf 1-156 (2023.1.10)
- 9) 内閣官房「 π 孤独・孤立対策に取り組む団体」
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodoku_koritsu_taisaku/kodoku_koritsu_dantai/index.html
- 10) 青森市「あおりフィールドスタディ支援事業」
<https://www.city.aomori.aomori.jp/keizai-eisaku/shiseijouhou/matidukuri/toshidukuri/>

chuushin-syoutengai/documents/04-03_hp-umekomi.pdf (2023.1.10)

- 11) 国際連合広報センター「持続可能な開発目標」
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/sustainable_development_goals/ (2023.1.11)
- 12) 菊池俊夫 (2019) 「東京大都市圏における「農」空間の保全と適正利用によるルーラルツーリズムの発展」農村計画学会誌, Vol.38, No.1, 15-18.
- 13) 宿利原 恵、井倉 洋二 (2020) 「高隈演習林教育関係共同利用拠点の取組(2): 地域コミュニティでの活動」鹿大演研報45: 1-6: 2020
- 14) 中山智晴、西方浩一 (2009) 「文京・食農教育ファーム」実践活動の試みと参加園児への影響」文京学院大学人間学部研究紀要Vol.11, No1, pp.147-168.
- 15) 桜井政成 (2016) 「キャンパス・コミュニティ・ファームを通じた世代間交流の可能性－大学生が三世代交流に関わることの意義・影響－」地域情報研究: 立命館大学地域情報研究紀要5: 119-132.
- 16) 今野聖士 (2021) 「コロナ禍における有償援農ボランティア事業の運営方式と課題」名余市立大学コミュニティケア教育研究センター 年報 第5号 (通巻39号) 17-26.
- 17) 吉長成恭, 進藤丈典, 中川勝喜, 石倉英樹 (2022) 「園芸福祉活動による認知症および介護度の重症化予防効果」甲子園短期大学紀要, 40巻, 3-10.
- 18) 山田由紀美, 大平和弘, 高田知紀, 赤澤宏樹 (2022) 「病院敷地内外の緑地の構成とリハビリの利用状況 及び効果に対する認識」環境情報科学論文集, Vol.36, 20-25.
- 19) 荒井菜穂美, 梅原瑞幾, 岩城慶太郎 (2022) 「短期ワーケーションが都心勤務者の心理に与える効果－奥能登における事例－」日緑工誌, J. Jpn. Soc. Reveget. Tech., 48(1), 129-132.
- 20) 一般社団法人日本ワーケーション協会「ワーケーションとは？」
<https://workcation.or.jp/workcation/> (2023.1.11)